

称号及び氏名 博士(看護学) 南村 二美代

学位授与の日付 平成23年3月31日

論文名 糖尿病の開示を視座にしたセルフマネジメント  
教育プログラムの効果

論文審査委員 主査 上野 昌江  
副査 旗持 知恵子  
副査 垣本 和宏  
副査 松尾 ミヨ子

## 論文内容の要旨

### 【背景】

2型糖尿病患者にとって、合併症の予防、QOLの低下を防ぐという観点から、良好な血糖コントロールのための適切なセルフマネジメント行動が重要である。糖尿病の開示という視座で、セルフマネジメント行動を考えると、糖尿病であることを他者に告げないことで、適切な行動がとれず、血糖コントロールの乱れを起こすという問題がある。患者自身が糖尿病であることを開示するか、しないかという側面が、セルフマネジメント行動に関与すると考えられる。しかし、セルフマネジメント教育において、糖尿病の開示を視座にしたストレスマネジメントに関する内容に取り組んだものはほとんどみられない。

### 【目的】

本研究の目的は、良好な血糖コントロールをめざすセルフマネジメント教育におけるひとつの視座として、糖尿病の開示に注目し、Lazarus& Folkmanのストレス・コーピングモデルとClairらによる開示・非開示決定の概念モデルから作成した概念図に基づいた教育プログラムを実施し、その効果を介入後の時期別に評価し、プログラム強化時期や内容について検討することである。

### 【方法】

研究デザインは比較介入研究である。対象は、2型糖尿病で外来に通院中の患者66名(年齢  $59.9 \pm SD 6.8$ )であり、従来の糖尿病教室に加え、糖尿病の開示を視座にしたストレスマネジメント教育を行った33名(介入群)と介入群と年齢、性別、介入前のHbA1c値でマッチングし、従来の糖尿病教室を行った33名(対照群)である。糖尿病の開示を視座にしたストレスマネジメント教育は、2回のグループセッション(120分)で構成し、

患者自身が糖尿病の開示・非開示について考え、再認識し、他の参加者の考えを参考にしながら、自分自身の糖尿病との関わり、自分に適しているコーピングや方略について考えるというプログラムである。アウトカム指標は、血糖コントロールの改善・悪化の評価として HbA1c 値、コーピングに関して尾関のコーピング尺度、ストレスに関しては Problem Areas In Diabetes Scale (PAID)、精神的健康状態に関しては WHO-5 精神的健康状態、食事の自己管理に関しては安酸の自己効力感尺度を用いた。評価時期は、介入前、介入終了後 1 ヶ月後、3 ヶ月後、6 ヶ月後の 4 時点である。分析方法は、両群内の介入前と介入後 3 時点それぞれの変化を Wilcoxon 符号付順位検定、両群間の介入前と介入後の 3 時点ごとの差については Man-Whitney 検定を用いた。有意水準は 5%とした。

### 【結果】

介入前の基本属性、糖尿病の状況において両群に有意な差はみられなかった。両群内の介入前と介入後1ヶ月、3ヶ月、6ヶ月の比較においてHbA1c値は、介入群では1ヶ月と3ヶ月で有意に低下し、6ヶ月では有意な差はみられなかった（介入前：7.50%、介入後1ヶ月：6.80%、 $p=0.00$ 、介入後3ヶ月：7.10%、 $p=0.00$ 、介入後6ヶ月：7.40%）。対照群では1ヶ月と3ヶ月では有意な差はなく、6ヶ月で有意に上昇していた（介入前：7.35%、介入後1ヶ月：6.85%、介入後3ヶ月：7.10%、介入後6ヶ月：7.45%、 $p=0.04$ ）。コーピングについては、介入群では、介入後3ヶ月の情動焦点型コーピングが有意に増加した（ $p=0.02$ ）が、対照群では有意な差がみられなかった。問題焦点型コーピングは両群とも介入前と介入後3時点で有意な差はなかったが、介入群では介入後に増加傾向が、対照群では減少傾向がみられた。PAIDの下位項目「周囲への感情」は、介入群では変化がみられなかったが、対照群では1ヶ月後に有意に増加していた（ $p=0.02$ ）。両群間の介入前と介入後3時点ごとの差の比較では、HbA1c値が介入後6ヶ月で両群間に有意な差がみられた（ $p=0.04$ ）。また、PAIDの下位項目「周囲への感情」は、1ヶ月時点で両群に有意な差がみられた（ $p=0.01$ ）。BMI、WHO-5 精神健康状態、セルフエフィシーに関しては、両群内、両群間のいずれにおいても有意な変化は認められなかった。

### 【考察】

ストレス対処には、多種のコーピング方略を柔軟に選択し使用することが好ましいとされている。本研究で糖尿病患者に対するストレスマネジメント教育を実施した介入群では対照群より、情動焦点型、問題焦点型コーピングに増加傾向がみられたことから、介入の効果が示唆された。また、PAIDの「周囲への感情」負担は、対照群では増したが介入群では変化がみられなかったことにより、何らかのディストレスの軽減に有効であると考えられる。教育プログラムの最終目標である血糖コントロールに関しては終了後1ヶ月、3ヶ月のHbA1cの改善に効果があり、6ヶ月後の悪化抑制に効果があること示唆された。しかし、介入群の6ヶ月時点の値は有意に低下していなかったことから長期間の血糖コントロールの維持にむけては、追加的に患者にコンタクトをとる必要があると考えられる。セルフエフィシーには変化を認めなかったが、糖尿病の開示を視座にしたストレスマネジメント教育プログラムは、患者のストレスコーピング能力を拡充させ、ディ

ストレスの軽減や血糖コントロールに対し有効であることが示唆された。